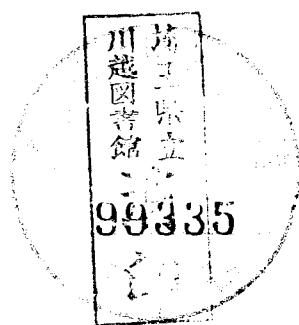


石川達三

薔薇と荊の細道

石川達三
薔薇と荊の細道



新潮社版



薔薇と荊の細道

石川達三作品集第八卷

昭和四十七年七月二十五日 発行
昭和五十二年十月十五日 六刷

定価九五〇円

著者 石川達三

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号

東京都新宿区矢来町七一六二

電話 業務部(03)二六六五二二

編集部(03)二六六五四二

振替 東京四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

装画 下田義寛

© by Tatsuzo Ishikawa 1972 Tokyo

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

薔薇と荊の細道

5

青色革命

151

解題

久保田正文

335

薔薇と荊の細道

薔薇ばらと荊いばらの細道

一番はじめ、何によって彼女は（愛）を知ったのだろうか。ヒヤシンスの花の匂い、猫の胸毛のやわらかな手ざわり、秋風の川岸で歌っている青年の遠い歌声、芸者のうしろ姿、人形あそび、父に叱られたときの父の怕さ、ひとり切りの湯ぶねの中でしげしげと眺めた自分の裸。

愛を知る機会は無数にあったに違いない。まだ骨格もとのわず、額の生え際には色のうすい生毛がもさもさして、唇はかさかさ乾き、白眼にはなお幼い時の青さが残っていた頃のことである。多分そのときに彼女はまだ、人間のいとなみとしての愛情が何を意味するものであるかを、知りもしない。何もわからないうちに一種不思議な情感が彼女の心をかきみだし、その不可解な情感に彼女は恐怖を感じたかも知れない。肉体が発達しはじめるよりも前に、もう何かが鋭敏になっていたのだ。草花の球根が、霜に掩われた土の下で早くも冬の終りを感じているように、また、薔よりもさきに幹が敏感になつていて、ひそかに樹液を満たして春を待つのと同じように、彼女の場合もまた、外には何も現れないあいだに内部にある生命が成長をはじめていたのだ。

それは彼女のあずかり知らないことであつた。生命の成長に個性は無い。背丈が自然に伸びるのと同じように、愛の感覚は自然に心のなかに伸びてくる。彼女らはそこで一つの誤りを犯しているようだ。

「わたしはわたしよ。私の愛情はわたしだけのものよ」

だが、愛情は彼女のものではなくて、自然のものであつたのだ。彼女自身が、自然界のなかの一匹の生物であるように、彼女の愛情もまた自然のものであつた。野々上ふさ子の場合にも、塩田伸子の場合にも、彼女の母の場合にも、そして幾時代をへだてた奈良朝や平安朝の女性の場合にも、愛情の最初の兆候にかわりはなかつた。個性の関与する場合はきわめて少ない。塩田伸子が最初に自分の心の中に愛を感じたのは、学校の運動場で（めくら鬼）をしていて、眼かくしをした男の先生につかまえられるときだつた。めくらの先生が両手をひろげて追いかけてくると、逃げそうにして逃げない。逃げてはまた近づく。ほかの女生徒が先生の両手にすっかりつかまえられるのを見ると、ぞつと肌が粟立つような気がして心がみだれる。彼女は逃げるようなふりをして、わざとつかまつてしまつたのだ。つかまえて貰いたい欲望がいつから彼女の心にひそんでいたのか、自分でも知りはない。捕えられると、不意にからだじゅうが笑い出した

のだった。首筋も肩も膝も、一度に笑い声をたてて打ちふるえ、先生の鬼の腕のなかで立ち竦んでしまった。

彼女の母の場合にはほんの少し違っていた。町の中学校の運動会で、大勢の見物人にまじって、マラソンの選手が決勝点にかけこむ所を見ていたのだ。五年生の選手がまっさきに、蒼い顔をして、頬をゆがめ、遅く太い足が疲れ切ってもつれそうになりながら、人垣のなかをぬけてゴールに駆けこんだ。往復四里の道を走ってきたのだ。五、六人の友人が左右からかかえる。地べたに崩れかかる彼のからだを抱きおこし、天幕のなかに連れて行く。人々のざわめきと賞賛の声にとりまかれて、彼は眼を閉じたままで喘いでいた。この勝利者はいまにも死ぬのではないかと彼女は思った。涙が出そうになって、彼女は人の群れをはなれた。

個性の差はたったそれだけのことだった。しかし彼女たちは自分のことしか知らない。自分の経験を自分ひとりのものと信じて、自然を無視する。自分を支配する自然の恐ろしさを知らないのだ。

最初に感じた愛の情感は、それが彼女の人生を支配する運命の片鱗であったことにも気がつかないで、彼女自身は忘れてしまったに違いない。しかしその小さな一つの印象は、消えて無くなるものではない。やがて二度目

三度目の経験がくる。はじめは半年に一度、次には三カ月に一度、やがては週に一度という風にくりかえされ、積みかさねられ、いつの間にかその情感が日常的なものになってくると、思春期がはじまる。皮下脂肪がふえて肩に丸味ができて、彼女はまた自分に気がつかない。骨盤がひろがり、女性の体格が美しい線をとのえてきても、彼女は気がつかない。ただ、黒子のように小さかった乳が痛んで、腫れて、ふくらんできたときに、(大きくなってお母さんになるためよ……)という、夢のようないきざしをもったにすぎないのだ。そのときはまだ、(母)という一つの結論が、美しい夢として感じられたばかりなのだ。その母となる時まで、どれほど長い苦難の道があるのか、想像してみたこともなかったにちがいない。

何も知らずに、彼女はいつの間にか、愛の苦難に接近していたのだ。

そのときから、もう何年か過ぎている。塩田伸子は完全に育った大人の体格をもっている。からだの輪郭が完全に美しくとのえられていると同じように、彼女の肉体的な生理も完全に美しい。少し赤いふさふさとした髪

毛。俊敏な、よく動く、利口そうな眸。処女の生命力をたたえた下顎の丸さ。(大きくなってお母さんになるため)の乳房は堅く盛りあがって、下半身の大きさと巧みな均衡を保っている。そして、頭の前から足の先までが鋭敏な神経によって統一されている。からだ全体が一つの受信機であった。どんなに弱い電波でも、彼女の髪の毛は繊細な幾万のアンテナとなって感受する。それが忽ちのうちに全身に波動をつたえ、耳と心臓と、脳と子宮とに緊張がおこる。一つのリズムが、幾つかの音楽となつて彼女の全身にひびく。

要するに彼女は完全に成育した処女なのだ。そして神経は過敏だった。それを保護するための皮膚は、まだ整っていない。女の成長は内部からはじまるものであるらしい。刺激という刺激はみな強すぎて、どの一つもが彼女を物狂おしくさせる。世間の波風に揉まれ、人生の愛欲に揉まれてゆくうちには、やがてその皮膚も厚みを加え、適度に鈍感になって、内部にある生理の過敏さを保護してくれるに違いない。それまでには五年も七年もかかるだろう。

彼女は一人の恋人をもっていた。生れてはじめての恋愛は、劇薬を注射されたのと同じようなげいしい刺激だった。そして不思議な反応が起った。緑色の衣服がきら

いになり人混みがきらいになった。魚がきらいになり父親もきらいになった。気むずかしくなつて、気が変りやすかった。鋭敏な受信機は雑音がいりやすいのと同じように、彼女の感情にも秩序の乱れがあった。その男と会つて話をしていると、急に腹がすいたり急に食欲が無くなつたりした。胃袋までが恋愛をしていたのである。ところがそれは彼女に限つたことではなかった。野々上ふさ子はその男と会つて話をしていると、鼻の先にしきりに汗をかいた。手のひらにじつとりと汗が出て来た。別れの握手をする前に、ふさ子は必ず相手にわからないように気を配りながら、ハンカチを握りしめた。全身の皮膚が、汗腺が、恋愛をしていたのだ。二人の女の個性の差は、胃袋と汗腺の差にすぎなかった。二人とも、一人の男を恋していた。

「ねえ野々上さん、恋愛と結婚とを、あなたはど思うの？ 必ず一致すべきものだと思う？」

「そりゃもちろん別だわ。一致すべきものだって言つても、一致しなかつたら仕様がなないじゃないの」

「じゃ、あなたは一致させるように努力する？」

「相手が望めば、ね」

「相手が望まなかったら？」

「それでもいいじゃないの」

「じゃ、あなたは相手次第？……個性が無いのね」

「それ、個性の問題かしら」

「個性でなかったら、なに？」

「じゃ、塩田さんは一体どうなの？」

「わたし、結婚なんか、しないもの」

「ほんとに、しない？」

「絶対！」

「恋愛は？」

「そりゃ、わからない」

「わたし、結婚して悪い事だとは思わない」

「ちがう。結婚なんて愚劣よ。何のために子供産むの？」

「……母性愛なんて、けだものだよ」

「何も子供産まなくたって、いいじゃないの」

「そのほかの事だって、愚劣よ。自由も何も無くなって、

男の性欲に奉仕するだけじゃないの」

「あんたの解釈、少し違ふと思うな」

「そうね。厳しすぎるんでしょう。知ってるわ。だけど

私は、あんたみたいなルーズな考え方なんか、できないわ」

「わたしルーズかしら」

「ルーズよ。とてもルーズだよ」

そばで浅野重雄が聞いていた。コーヒーを飲みながら、喫茶店のレコードに合わせて靴の爪先をここと鳴らしていた。二人の会話は、浅野重雄に聞かせるためのものではなかったろうか。二人で示威運動をしていたのではないのか。手きびしく相手に斬りつける、短くて歯切れのいい言葉。自分の理知を誇示するための強烈な極端な表現。機知と独断。

娘たちが、スカーフや靴や革のバンドやスエーターなどに、赤い色を用いて自分を誇示するのと同じように、強烈な言葉を用いることによって、男に自分の存在をはっきり印象づけようとしていたのではなからうか。大事なのは会話の内容ではなくて、言葉の切れ味ではなかったのか。七つ八つの男の子が、自分の家どこかの小母さんが訪ねて来たりすると、殊更に危ない木のぼりをして見せたり逆立ちをしたり飼犬をいじめたりして、自分の存在を誇示しようとする、あの不思議な気違いじみた本能の姿と、似たようなものではなかったらうか。言葉だけで木のぼりをしたり逆立ちをしたりしていたのではなからうか。子供の乱暴が真剣のように、彼女等も真剣だったに違いない。何のために、それほど真剣になるのか、彼女たちは知ってはいない。伸子は絶対に結婚しな

いという。恋愛さえも、どうだかわからないという。それでは何のために真剣な表情で、野々上ふさ子をやっつけようとするのか。

それは多分、彼女の意志ではないのだ。そうしようと思つてそうしているわけではない。子供が、なぜ急に木のぼりがしたくなり、犬を苛めたくなつたのか、子供は知らない。彼女もまた、何も知つてはいなかつたのだ。

純潔な、そして可憐な処女の魂は、小さな刺激にも易易と傷つけられてしまう。どんな小さな傷でも、軟らかな心の肌には、痛くてたまらないのだ。その傷を癒すためには、どんな苦しい事でもやつてのけるに違いない。

クリスマスの前夜、日が暮れて間もないころから、塩田伸子はひとりで浅野重雄をたずねて行つた。風のない暖かい夕暮であつたが、彼女は厚い外套の下で慄えていた。なぜか家を出る前から慄えが止らなかつた。皮膚が外気のさむさで慄えているのではなくて、胸の底の方から慄えが伝わってくるのだつた。猫の子が犬の姿を見つけたとき、身ぶるいして全身の毛を逆立てる、あれと同じように、危険を予感して彼女の心が戦慄していたのだ。しかも自分から、彼女は危険にちかづいて行くのだつた。

なぜ危険に近づいて行くのか。——それは彼女の知つたことではない。やめようと思つてもやめる事ができなかったのだ。意志でもない、理性でもない、感情でさえもない。ただ彼女の全部が何かしらに曳きずられていたのだ。暗い道をいそぎ足で歩きながら、ときどき涙さえもこぼしながら、息が切れるほど道をいそいでいるのだからだじゅうがたがた慄えていた。(浅野さんは間違つてゐる。どう考えて見ても間違つてゐる!)……その間違いを忠告してあげるために、彼女は彼に会おうと決心したのだつた。

彼は贅沢なアパートに住んでいた。二階の、三つ並んだ細長い窓に、野々上ふさ子のずんぐり肥つた影が、大きくぼやけたり黒くしぼんだりしながら揺れ動いていた。街角にたたずんで見ていると、帽子をかぶつた浅野の影が窓にちかづいて、鍵をかける音がきこえた。灯が消えた。そして二人がしゃべりながら玄関から出てきた。野々上ふさ子は寄り添うて彼の腕に腕をからんでいた。

彼女は二人のあとにしたがつて、二十歩ばかりはなれたところからついて行つた。尾行するつもりなのか、二人の秘密を嗅ぎ出そうというのか、低く頭を垂れ、道の片側に寄つて、足音も忍ぶような風に歩いて行つた。むしろ、打ちのめされた姿だつた。それからち、夜の十

時ごろまで、殆ど五時間ちかくも彼女は二人のあとを追いまわしていたのだ。街々はクリスマススの賑わいで、着飾った人々が渦巻くように流れ動いていた。どれほどの苦痛を彼女は耐え忍んだことであろうか。そして、どのような強靱な力が彼女にこれほどの忍耐を為し遂げさせたのであろうか。若い娘の繊細なたおやかな肉体の中にあの慥え勝ちな弱々しい感情のなかに、どのようにしてこれほどの粘り強い力がひそんでいたのであろうか。その強靱さこそ、青春というものであるかも知れない。彼女はもはや慥えてはいなかった。むしろ落ちついて、冷静な表情をしていた。二人はアパートを出てから電車に乗った。銀座の街に出て小さなレストオランにはいつて食事をした。塩田伸子は外の広告塔のかけに佇んで、二人が出てくるまでの四十分を待っていた。買物をかかえた夫人たち、酔漢、子供たち、娼婦。行きすぎる人の波には全く無関心なかたちで、彼女は靴の先で凍てついた歩道をたたきながら、考えふけていた。

食事を終ってから浅野とふさ子とはダンスホールへ行った。そこで二時間。ふさ子は浅野の肩に頭をもたせかけ、彼の抱擁に身をまかせて、眼を閉じたままで踊っていた。彼女の頭の中ではありとあらゆる（悪いこと）が幻想されていたに違いない。ジャズ音楽は理性を麻痺さ

せる妖しい力をもっている。カトリック教会のミサの音楽、仏教の寺の鳴りひびく鐘と單調な木魚との調和。そのほかすべての宗教音楽が、信徒の理性を奪い去って、けだもののような素朴で従順な情緒のなかにさそい込み、本能的な陶醉にひたらせる、あの妖しい魅力が、ジャズ音楽の魅力でもあるのだ。理性の力がなくなり、従って個性の作用が弱くなると、原始的な本能が人間を支配する。彼女はダンスの喜びにひたつたつもりであつたろうが、彼女の肉体は性欲の陶醉にひたつていたに違いない。自分ひとりの性欲。――紙のテープや紙吹雪が投げられ、中央のクリスマスストリーの豆電灯が明滅し、色紙の帽子やマスクをかぶって、人々は笑いさざめいていた。ホールの外の暗がりには塩田伸子がひとりでたたずんでいる。恋愛の残酷さ。他人を不幸にすることによって自分だけが幸福になれる。青春とは、闘争であつた。闘争に耐え、闘争に打ち勝つだけの、美しさと、狡さと、残忍さを持つた者だけが、勝利の喜びにひとり得るのだ。青春が、必ず通らなければならない年齢的な一時期であるように、闘争もまた避けることができない。女性は宿命的な残忍さを、神によって与えられているのだ。一人の女は、あらゆる女と戦わなければならない。

(浅野さんは間違っている) 塩田伸子はその想念から離れることができない。彼等が食事をしている間も踊っている間も、空腹すらも忘れて、彼女は自分の想念を追いまわしていたのだ。浅野の父は戦争犯罪人のひとりとなつて巣鴨の拘留所に入れられている。彼の母は郷里にいる。彼は彼女と同じ紡績会社につとめて、総務課の部屋にいる。昨年大学を出て、英語が殊に達者である。野々上ふさ子は伸子が浅野に紹介したのだ。彼女は安心してふさ子を紹介した。何の取り柄もない友達であつたから容貌、姿態、知性、芸術的感覚、趣味。どの点をくらべて見ても彼女はひとつふさ子に劣るところは無い。彼女は男の眼で、二人をちゃんと比べて見て貰ひたかつたにちがいない。優越の喜びを予定していたのだ。どこに計画の狂いがあつたのだらう。なぜ浅野ほどにしつかりした青年が、野々上ふさ子とあんなに親しくするのか、伸子には理解できない。彼は何か間違っているのだ。彼女は自分が浅野を恋しているとは思わない。恋愛なんか嫌いだ。大体恋愛なんて、知性が無いわ！ だから、決して自分のために言うのではない。あれだけは見過して置けない。浅野さんは何か間違っているのだ。彼女は忠告の義務を感じる。ただ(忠告)だけの(義務)だけを

感ずる。絶対にそれだけだ。

その、忠告の義務を敢えて果すべきかどうかを考え迷いながら、クリスマスの前夜を、五時間ちかくも二人について回つたのだ。ホールから街の散歩に、買物に、喫茶店に、それからふさ子を四谷駅まで送つて行く二人のあとを追いまわして。……

駅のまへの暗がり、彼等は握手をした。浅野はあたりを見まわしてから、外套の中に彼女を抱きかかえた。接吻したのだ。駅の建物のかげに身をかくしたままそれを見たとき、嗚咽がこみあげてきて、伸子は眼を逸らした。(忠告の義務)は、もう間に合わないかも知れない。

浅野重雄はそれから市街電車で新宿へ出た。伸子はどこまでもついて行つた。なぜ自分がこれほどまでに彼のあとを追いまわすのか、彼女は考えても見ない。五時間にわたる悪魔のような執拗さを、自覚してはいないのだ。むしろ彼女は、自分が人間として正しい義務を履行するために、神のような純真な意図をもつて、彼に会う必要があると信じていた。絶対に、誰に聞かれても恥ずかしくない行動である。友人としての崇高な使命であると思つていた。……それならば、彼等が駅の横の暗がりて短い接吻を交わしたとき、なぜ不意に嗚咽がこみ上げてき

たのか。野々上ふさ子が男の肩にもたれかかって歩きながら、ハンカチを出して幾度か手のひらの汗をこっそり拭いているのを見たときに、なぜ眼がくらむような失望におち入ったのか。

彼女は説明ができない筈だった。しかし説明しようとは思わないし、考えたくもないのだ。(私のことなんか、何も有りゃしないわ。あの人に忠告してあげるだけじゃないの)

彼女は自分の恋愛を否定する。肯定することの悲劇に耐え切れないのだ。もしも自分の感情が恋愛であるならば、心の痛みに耐えるだけの力を彼女はまだ持つてはいない。ひよわな骨格はその苦痛のためにばらばらに崩れてしまっだろう。否定することによって辛うじて生きていられる。ちょうど胃^い癌^{がん}にかかった老人が、胃癌ではないと信じることによって辛うじて生きていられるのと同じことだ。彼女には自分の虚偽がわからない。それは本能的な虚偽だった。自分を偽ることによって自分を生かす。自分の眼から自分の姿を晦^{くも}ましてしまふのだ。正確に自分の姿を見たくはない。見ることの苦痛に耐え得ないのだ。本当の自分の姿は、残忍、酷薄、卑屈、狡猾、食欲、あらゆる悪徳を、美しいたおやかな肉体の中に一杯詰めこんである、悪徳の玉手函^{たまてばな}だった。しかしそれは

彼女の罪ではない。彼女の個性ではない。彼女の母も、父の妾^{めかけ}も、野々上ふさ子も、みんなが持っている埃箱^{埃箱}にすぎない。彼女等は賢明にも、決してこの悪徳の蓋^{ふた}をあけて見ようとはしない。開けることのできない玉手函である。彼女等はすべて自己を偽り、自分の眼から自分の姿を晦^{くも}ましたままで、生涯を生きてゆく。ついに真実の自分の姿を知ることもなく、美しい生涯を美しく仕合せに送って行くのだ。

新宿の表通りもクリスマスの賑やかな人の流れで埋まっていた。その雑沓^{ざつさつ}のなかで、伸子をはじめ浅野に追いついた。なぜか急に耐えられないほどの空腹を感じ、気落ちがして、元気がなかった。

「浅野さんでしょう？……ああ、やっぱりそうね。うしろ姿が似てると思った」

「やあ。どうしたの？」

「クリスマスだから遊びに来たのよ」

「ひとり？」

「うん。良いところで会ったわ。あんたに話があんのよ。お茶でも飲まない？ 御馳走^{ごちそう}するわ。今日はどこで遊んで来たの？……当てて見せようか。銀座。ちがう？」